

派遣先所属 岩手県沿岸広域振興局農林部宮古農林振興センター林務室
氏 名 杉木 徳行 (すぎき とくゆき)
派遣期間 平成30年4月1日～平成31年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

派遣先の宮古農林振興センター林務室では、宮古・下閉伊地域の民有林16万5千haを管轄として森林・林業に関する業務を行っており、東日本大震災関係では主に海岸防災林の復旧事業に取り組んでいます。海岸防災林は人家等を飛砂、潮風・強風の害等から保護するため整備された森林ですが、震災津波により林帯が流失し、機能の発揮ができない状況となっています。岩手県では、被災した海岸防災林26箇所のうち19箇所について復旧を計画し、震災から7年8ヶ月が過ぎた現在で、完了10箇所、復旧中6箇所、未着手3箇所という進捗状況になっており、失われた防災林の機能回復を早期に図るべく森林整備が急がれています。

主な担当業務は田野畑村明戸地区にある海岸防災林の復旧事業で、工事の設計、発注及び現場監督業務を行っています。この地区の防災林は昭和8年の昭和三陸津波後に県が整備したもので、全長約200m、奥行き約400mの区域にクロマツが植えられていましたが、震災津波により2本を残して全て流失しました。再造林にあたり、津波に対して根返りしにくい林帯を造成する観点から高さ2.4mの盛土を行い、その上に約1万本のクロマツを植栽する計画とし、他所管復旧事業と調整を図りながら工事を進め、平成31年1月に完了する予定となっています。本年8月には、防災林の役割の周知及び震災の風化防止を目的として再生記念植樹会を開催し、地区の住民や森林愛護少年団の児童ら約100人に参加いただき、鳥取県から寄贈されたクロマツの苗木約500本を植えました。復旧事業で植えたクロマツは、およそ40年後には高さ20mまで成長し、再び美しい海岸防災林が成林する見通しです。

海岸防災林は、震災津波から多くの命や財産を守りました。失われた防災林は本来の機能を取り戻すまで長い時間がかかりますが、被災前のように地域住民に親しまれる森林に育ってほしいと願っています。40年後、私が生きているかどうか判りませんが、機会があれば再生したクロマツ林を訪れたいと思います。



明戸地区防災林事業地 (H30. 10月末現在)



再生記念植樹会

2 被災地の復旧・復興の状況

沿岸地域においては、沿岸を南北に縦断する三陸沿岸道路の整備が進んでおり、本年3月には宮古市田老と岩泉町間の延長約10kmが開通しました。また、6月には宮古市と北海道室蘭市間を結ぶフェリーの運航が開始となり、来年3月には震災津波で不通となっている鉄道の山田線宮古一釜石間が運行再開を迎える見込みとなっています。一方で、津波跡地を見ると空地が多く、インフラ整備が進んでも人が戻ってきていない様子が窺えます。

震災や少子高齢化の影響等により、人口減少が進んでいる中、どのようにして産業を再生し、中心市街地ににぎわいを取り戻していくのか困難な課題に直面していますが、住民が一人でも多く地元に着し、地域の活性化が図られるよう、魅力あるまちづくりに微力ながら貢献していきたいと思います。

3 被災地へ派遣となって感じたこと

西日本豪雨、北海道胆振東部地震など近年大きな災害が多発し、マスコミ等を通じて大きく報道されています。しかしながら、時間の経過とともに被災地の情報が提供される機会は少なくなっています。東日本大震災も発生から7年が経ち、遠方にいると記憶も薄れつつありましたが、岩手県に派遣され、復興業務に携わることで改めて震災の記憶を思い起こしました。

被災県では、各地で震災復興のシンボルや震災遺構を整備し、語り部による被災体験談などを通じて、震災の記憶・教訓の伝承に取り組んでいます。戦前の物理学者である寺田寅彦が「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉を遺しましたが、災害の緊張感や心構えを忘れることなく、被災地の復興状況を地元へ伝え、少しでも防災・減災意識を高めていくことの大切さを感じました。

最後に、遠く岩手にこころよく送り出してくれた妻子、派遣先でお世話になっている林務室職員の皆さんに感謝申し上げます。



震災遺構「明戸海岸防潮堤」